
世界を再著述する

組織、コミュニティ、個人の変革につながるナラティブ実践

シュネ・スワート著

国重浩一、飯島邦子、松本加奈子訳

北大路書房、A5判296頁、5,280円、2025年11月刊

(東北大学大学院教育学研究科) 若島孔文

本書は、マイケル・ホワイトとデイビッド・エプストンによって提唱されたナラティブ・モデルを基盤に、心理療法という専門領域を軽やかに飛び越え、「その考え方、組織やコミュニティ、家庭でも使えますよね？」と真正面から問いかけてくる一冊である。カウンセリングルームの中で完結する話ではなく、日常生活という“現場”にナラティブを連れ出そうとする、なかなか野心的な企てだ。

そもそも多くの心理療法がアメリカ生まれである中、ナラティブ・モデルの生みの親であるホワイトはオーストラリア、エプストンはニュージーランドの臨床家である。多民族社会と移民社会という、「物語が一つで済むわけがない」土壤が、このアプローチを育てたのだろう。そして本書の著者シュネ・スワートの足場は南アフリカ。もうこの時点で、単一のドミナント・ストーリーに安住しない気配が濃厚である。

本書は、南アフリカ社会における女性の生き方、そのドミナント・ストーリーを、著者自身がオルタ

ナティブ・ストーリーへと再著述するところから始まる。つまりこれは、セラピストが理論を語る本ではない。著者自身がドミナント・ストーリーに挑み、「では別の物語を書いてみましょう」と実践してみせる本なのである。その姿勢は一貫しており、どこか活動家のようですらある。

第7章までは、ナラティブ・アプローチの基本的な考え方や用語が、初学者にも分かりやすく整理されている。地図とコンパスを渡される時間だ。そして第8章以降、舞台はグループ、コミュニティ、組織へと一気に広がる。著者は、リスニングや質問に関するナラティブの原則に基づいたガイドラインを提示し、人々が互いのストーリーを共有し、コミュニティに埋もれていたギフトや才能、スキルや能力を掘り起こし、再著述していくプロセスを丁寧に描いていく。

では、このアプローチが学校や会社に導入されたら何が起るのか。会議は少し対話的になるのか、評価面談は尋問から物語の共有に変わるのか。産業・組織領域や組織開発、サーバント・リーダシップに関心をもつ人々なら、自然と想像が膨らむだろう。著者スワートはその可能性を知っており、多くの人と組織がこの実践を手を取ることを願って本書を書いている。

本書の対象読者は専門家に限られない。家庭で、学校で、職場で、私たちが人間として生き、関係の中で物語を紡ぐあらゆる場面に応用可能である。極論を言えば、読者層は全人類。少々大きな物言いだが、読み終えれば不思議と納得してしまう一冊である。

原書：Chené Swart : Re-Authoring the World : The narrative lens and practices for organisations, communities and individuals